熊本大学教育学部紀要
第65号, 195－202, 2016

屋外壁画制作の研究

―附属特別支援学校における試み―

松　永　拓　己

A Study on Outdoor Mural Painting Work

― A Trial in an Attached Special Support School ―

Takumi Matsunaga

(Received September, 30)

This paper is study on outdoor mural painting work. By the request from a Kumamoto University attached special support school, I draw a picture on the gymnasium front surface of a wall. I have so far performed mural painting work. It is the feature to draw a picture this time based on the picture which a disabled person draws. I can perform this practice now as part of a lesson of a university.

It is the feature that the University students of Kumamoto University and children with a handicap draw together. The children of the special support school drew the picture on the theme of "a dream and hope." Matsunaga dealt with the original picture based on the handicapped child's picture. I chose 12 pictures and made one picture taking advantage of each merit. Taking advantage of " L'art brut ", I am pushing forward the charm of children's picture. By the fresh pattern, I devised activity suitable also as university education. Everybody drew helping each other mutually. I inquired, practiced and summarized those measures.

Key words: Picture, Art, Mural painting, Special support school, Disabled person, Child.

1　はじめに

1－1 研究の背景と目的

屋外壁画制作は各所で行われている．松永もこれまで，熊本市旧産業文化会館外周壁画，阿蘇内牧屋外壁画，かんぽの宿屋外壁画等取り組んできた．各所で依頼に応じ新たな魅力つくりの一端を行ってきた．手法と内容も，その都度考察し研鑽を重ねている．それらは特色ある壁面つくりを多人数で行う制作方法であり，企画力，絵柄，技術力が問われている．高い芸術性で多数が携わり満足いくものが出来る高次な制作を模索し，研究する．

1－2 本研究の位置づけ

本研究では，これまでの制作研究（「屋外壁画制作による地域貢献　－阿蘇内牧において－」・松永 2014）（「屋外壁画制作による地域貢献 2　－教材化の可能性－」・松永 2015）（屋外壁画制作の研究　－台湾での制作－　・松永 2016）を踏まえ，絵画制作方法，実践的展開の在り方を図る．熊本大学附属特別支援学校屋外壁画でさらに有効な制作手法を検討し，多くの関係者がより達成感を感じるものを考える．本稿において子ども達が描く絵の魅力と，壁画制作での達成感を感じる制作を行うための原画作成方法と，誰もが参加できる全員参加型制作方法の試みを検討･実践する．

2　附属特別支援学校屋外壁画での検討課題

2－1　屋外壁画の検討

平成 27 年度，熊本大学附属特別支援学校からの依頼を受け，創立 50 周年記念の記念イベントとして壁画制作をおこなう．その制作において, 取り組み方法, 絵柄の内容を考察し，新たな特色ある壁画制作として検討する．それは障害をもつ子ども達の絵の良さを引き出し, 達成感を感じる作品に仕上げることを考える．

2－2　熊本大学特別支援学校について

熊本大学特別支援学校は，昭和 25 年 4 月，熊本大学教育学部付属小学校の特殊学級を開設に起源をもち，昭和 40 年 4 月に附属小学校及び中学校の特殊学級を母体と，附属養護学校として設立される．平成 27 年に創立 50 周年を迎える歴史ある特別支援学校で

ある.

現在（平成 27 年度），小中高等部 9 学級全校生徒 61 名の規模の学校である．様々な障害を抱える児童生徒が学ぶ学校である.

2 － 3　壁画制作取り組み方法

壁画制作にあたり学校の敷地，立地の状態から，壁面は附属特別支援学校の入口にある体育館前面の壁を制作壁面とし検討する．依頼のあった場所を調べ，制作可能な部分を選定し絵を描く．絵柄，制作方法として，「これまでの感謝とこれからの夢を描く」という目的が挙げられ，全校生徒が関わり記念として残るものを検討する．そこで，平成 27 年 6 月 15 日に全校児童生徒にテーマを告知し「夢と希望」という内容で描いてもらうこととなった．61 名の子ども達の絵を基に松永が原画を作成する制作計画である.

原画作成の後，壁画制作の日程計画は平成 27 年 10 月 23 日（金）～ 25 日（日）とし，大学生，教職員，特別支援学校の子ども達を交えた制作計画とした.

2 － 4　本壁画制作の課題

本制作における 2 つの試みを考察する.

1) 原画つくり

原画は子ども達の絵を使用する．アール・ブリュット（L‘art brut），すなわち「生の芸術」の作品意義を見出し，その良さを生かす．フランス人画家ジャン・デュビュッフェ（Jean Dubuffet　1901 ～ 1985）が主張したこの芸術の 1 つの考え方は, 既存の芸術に対し, 従来の芸術の価値観とは異なる芸術性を認める．一見荒削りな作品の中に新たな価値観と生の純粋な芸術性を見出す.

子ども達の原画は，そのまま使うのでなく，エッセンスを生かしで組み合わせ，大壁面に叶う原画に松永が再構築する．壁画は，附属特別支援学校創立 50 周年に相応しいものとし，「夢と希望」に溢れるものであり，学校の入口に掲げるものとして意味あるものであることが必要である．尚且つ全校児童生徒の絵を基に原画を作成し，芸術的で短期間で描けるものであることも考慮する．それにより，全員が壁画制作に携わることが出来，作品制作の意義が高まる.

苦慮する点は子どもの絵をそのまま壁画作品にするのではなく，アール・ブリュットの芸術性を生かしつつ，壁面に合うように加工し，且つ，描きやすいようにすることである．芸術のある捉え方である, アール・ブリュットには感嘆するが，前衛的作品であり，多くの理解が進むのか，私的判断であるが不安が伴う（偏見や，未だ至らないと感じる教育の光の届かない個所であると感じ，自身も教育に携わる中で苦慮している部分であり，反復しながら省みる部分である．理解が進むことを望む.）．アール・ブリュットが奇抜で興味があり素晴らしいと感じる作品であるとの感じ方であるならば, それも有りがたいことであるが, 一過性の, 短流行的要素として存し，芸術の神髄に触れる要素を孕むことに重きを置かれる理解に至らないならば，残念ながら一部についていつか理解なき事象が起こりうると懸念する．これらは，ただ子どもに（特別支援学校の子どもに）描かせた作品と言うだけでなく, その, 純粋に世界と向き合い，世界の見方や物の捉え方などを旧来からの価値観（物の捉把握の仕方，遠近法・短縮法ほか等）による良作であるはずとの絵の指導（指導者に問題ではなく，絵画の大きな捉え方で世界観を表わす視野の問題であり，種々の技術指導で見えなくなってしまう人間個の絵画表現の束縛のデメリットを危惧していることである．しかしながらアール・ブリュットの世界の捉え方とは異なる感じ方にも理解している.）でなく自己の見方，表現能力に応じながら個の思いのままに感じ，手と絵具を操作した中で現出した（表現した）絵である．遠近法はルネサンス期に確立した一つの絵画技法であるが，例えば 19 世紀に印象派，20 世紀のパブロ・ピカソ（Pablo Ruiz Picasso　1881 ～ 1973）等によって絵画に世界の捉え方新たな視座が齎されされ，その後，今日に至る，多様な絵画（2 次元表現）の可能性が研究されてきている．20 世紀半ばに唱えられたアール・ブリュットも斬新かつ今日に続く絵画の一つの考え方・捉え方である．そういう意味では見たこともない世界を表わしてくれる前衛的作品である．だだし，子どもの絵（ここでは特別支援学校の子どもの絵がすべてアール・ブリュットとは言わない．純粋に自己と向き合い，芸術性を意識的・無意識的に求め，本心で諦めず描くことを最後まで追及しえたと私が感じる表現画にその魅力を感じてしまう．このことについては，今後研究を行う.）

子どもの，ここでは特別支援学校での子どもの「生の芸術」をくみ取り，そして，大壁面に似合う構図に集約し，しかしながら構図･表現手法の要素を生かし，松永の判断で洗い直し（私は遠近法も短縮法も知らない訳ではなく，指導できない訳でもなく，束縛されてしまうであろう絵画表現の可能性に，子ども達の個の中に煌めく絵画世界表現にフィルターをかけ，またバイアスがかかることに対し，絵画表現可能性への懸念をここでは覚えるということである. アール･ブリュットの作品は遠近法や短縮法の価値観では間違い・出鱈目と言わざるを得ない絵画作品群となる．しかしながら私は，人が心の奥底で捕えたイメージと，それを純粋に表記具で現出させた絵を人間の芸術に求める究極の作品の可能性を感じとり，一般的技法に，意識的か無意識気的か頓着しない特別支援学校の子ども達の作

品に対しても理解するものである. 今回, これらのアール・ブリュット作品を壁画原画として採択する．無論それ以外にも素晴らしい作品群は多々ある.）アール・ブリュットで描かれた作品を，今回掲げられたテーマに沿わせながら一般の大衆に分り易くまとめ揃え，原画を作成した.

また，今回は，全部の特別支援学校の障害の差を厭わず，屋外での大画面壁画に子ども達全員の参加を期待するため，高度な絵画表現技法は伴わないながら上質な作品になる原画となることも考慮に入れ作成した.

2）全校児童生徒参加実制作

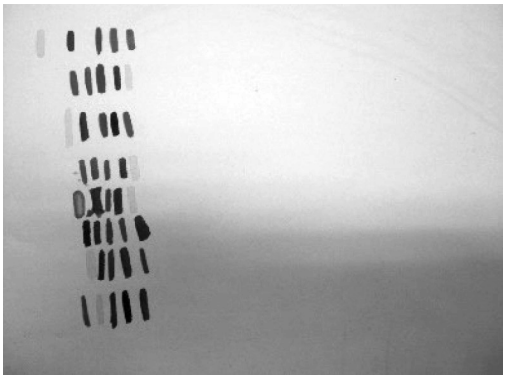
縦 5m，横 20m の壁面である．手の届く範囲である縦の高さが問題であり，足場の設置が必要である．また，大壁面であることで大量の画材等の材料費等が必要とされる.

特別支援学校の子ども達が参加できるものにするために絵具，参加形態の工夫が必要となる．高度な描写表現を取らず短時間で描け，且つ制作の満足感と完成の達成感を感じることが出来る参加手法を考察する.

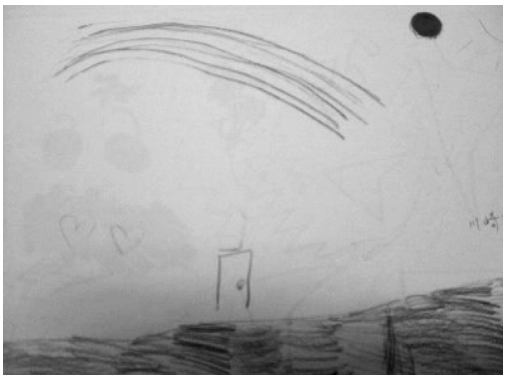
3　本壁画制作実現に対する取り組み

3－1 原画つくり

特別支援学校児童生徒 61 名の子ども達の絵 200 余枚の絵が寄せられた．その中から原画に生かす作品を選定した．アール・ブリュットの良さを感じさせる 12 作品を取り上げ一つの画面にまとめた.

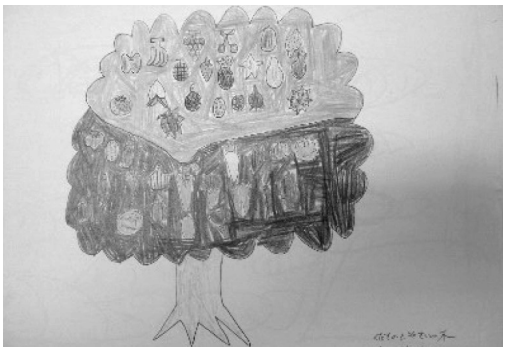


（図 1）絵 1

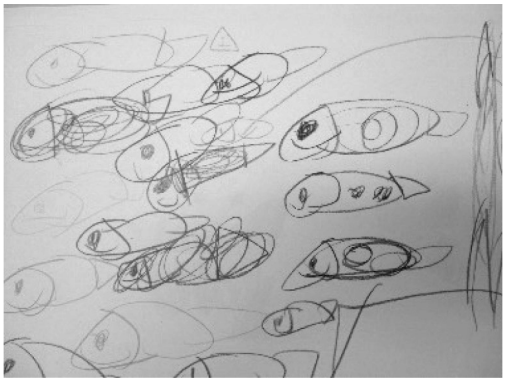


（図 2）絵 2

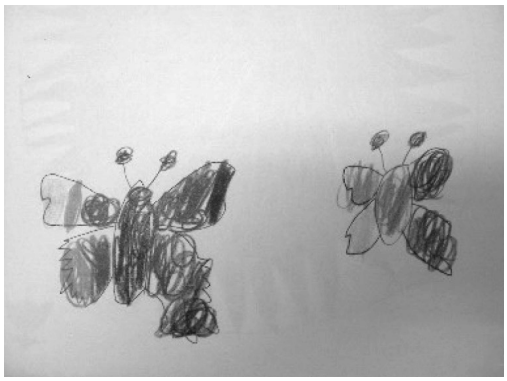
（図 3）絵 3



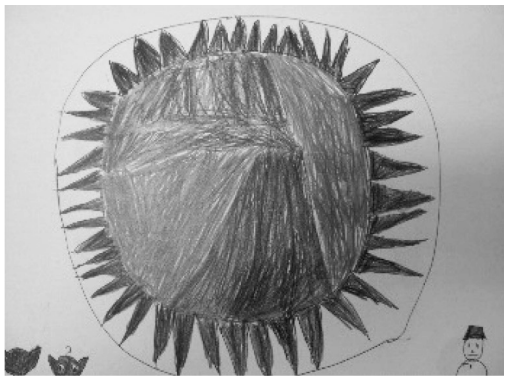
（図 4）絵 4



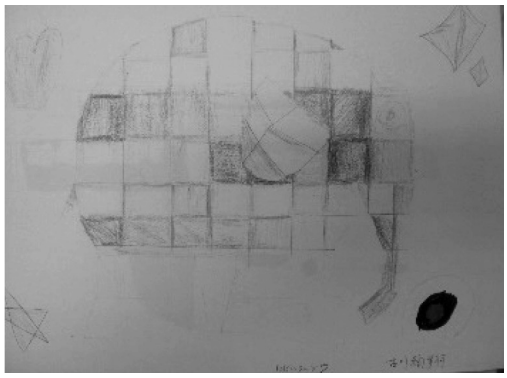
（図 5）絵 5



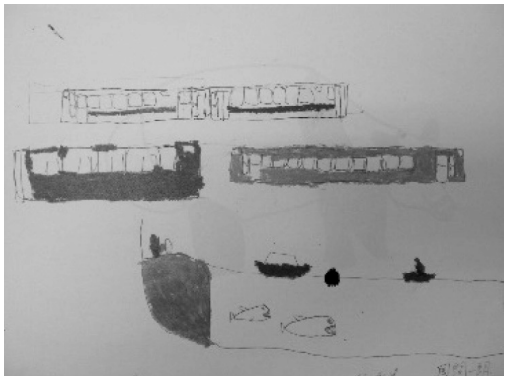
（図 6）絵 6



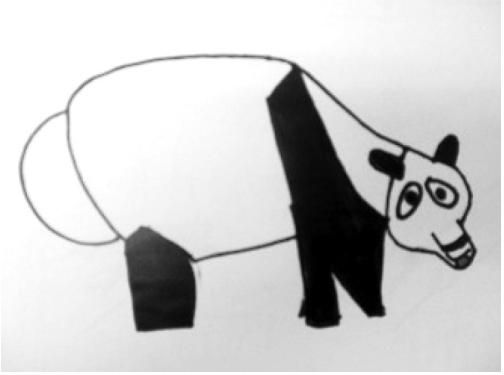
（図 7）絵 7



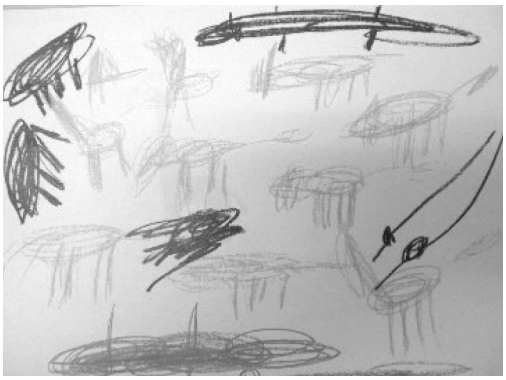
（図 8）絵 8



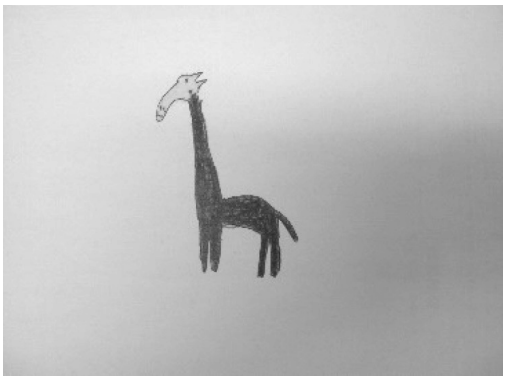
（図 9）絵 9



（図 10）絵 10



（図 11）絵 11



（図 12）絵 12

これらの絵を基に一つの画面にまとめる．生き生きとして個性的であり，絵柄に夢があり力が溢れるものとして選び挙げた．どこにもない，それぞれ個性的で魅力的で子供らしい夢を感じられる作品群である．12 作品の配置，大小関係を操作し，全体をまとめる工夫を行った．

絵 1・・・虹を描いたものである．点々で描かれた様々な色の虹が個性的であり，色点の並びが面白く，その感性を生かすこととした．

絵 2・・・虹の表現が固定観念に嵌らず，不思議な色・数である．また，地上では 1 つのドアが立っている．この感性とドアから色々なものが

溢れることで夢と希望が強調される．

絵 3・・・紙飛行機と思われる形体が面白く彩りに溢れ上昇していく姿を生かす．

絵 4・・・色々な果物が実る 1 本の木であり希望が感じられ，緑の色を 2 段に分けてある感性を生かすこととした．

絵 5・・・魚が沢山泳いでいる．その表現方法が自由で明るく伸び伸びとした表現であり，溢れだす魚たちに夢と希望を託すこととした．

絵 6・・・2 匹の蝶が描かれているがデザインと彩りが斬新である．その感性を生かすこととした．

絵 7・・・花である．まるで太陽のように描かれた力強さと，斬新なデザインと彩りである．円形でやさしさと力強さを備える絵柄である．大迫力で描くモチーフとした．

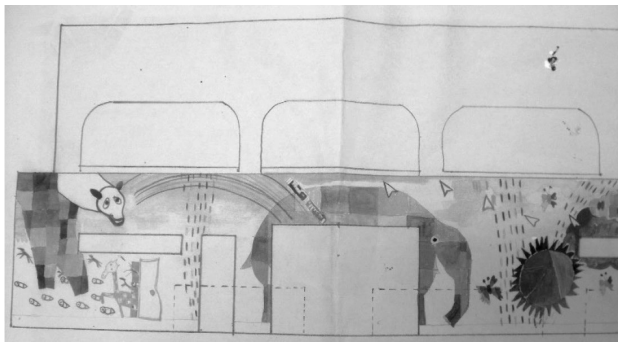
絵 8・・・横向きの象である．彩がパッチワーク表現でありユニークである．大画面に描いた時の迫力を考え，中心絵柄とした．

絵 9・・・細かい表現で電車を描いている．好きなものを描いている心境が伝わる．虹と組み合わせて表すことで空を走る電車とした．

絵 10・・パンダと思われる．形体のユニークさと表情の面白さを取り入れ生き物のもつ生命感と愛らしさを生かす絵柄とした．

絵 11・・四足動物である．表現の面白さと元気良さが見どころである．

絵 12・・四足動物（キリン ?）である．模様の面白さと表情の愛らしさを生かし，歩いている姿とした．



（図 13）原画

（図 13）は 12 枚の児童生徒の絵を基に作成した原画である．体育館入口にカラフルな巨象を配し，象に合わせ左端にカラフルな巨大パンダを配した．右端にカラフルな巨木を配し，壁面全面に視線が行渡る構成とした．巨大なカラフルな花を巨象の正面（視線の方向）に配し，関係性を持たせた．上端から点描の虹を雨のように 3 か所配し，それぞれ角度を変え単調にならないようにした．巨象の背中辺りから描線の円弧の虹を差しその上に走る電車の配し，大小，遠近の関係性を夢のように描いた．象とパンダの間の空間にはドアを配しその隙間からキリンや魚，動物たちが左上方向に飛び出してくる絵柄とし，構図に動きを持たせた．また，紙飛行機や蝶を各所に配し飛翔する感覚を画面に持たせた．背景は青のグラデーションを上端から下端まで配し，広がる明るい空間で全体を統一した．また，四角の色彩片の表現は巨象だけでなく，随所に入れ込むことで画面の統一感を高めた．学校の入口に相応しい元気で明るく且つ上質な作品になるべく考案した．

この原画は 3 日間で実現できる本壁画制作時間を考えて作成した．

4　壁画制作

4 － 1 児童生徒の制作参加計画

本壁画制作において児童生徒の参加は学校側の協力により教員が付く形で行い，さらに大学生参加者の助力を受けながら制作を行うこととした．授業の都合により参加日時・時間帯が限られた中で壁画の進行に合わせて計画を練った．

附属特別支援学校の小中学生は制作 1 日目の午後に参加であるため下地塗りを行う．高等部は後日（披露会）で行うことになり，壁画はほぼ仕上げられた後となるため，原画を変更し，下端に地面描写を付け加え，それを四角の色片で分け，24 人分の制作スペースとした．また，壁画の完成は，巨象の目を入れることで完成とし，それを子どもに行わせることと計画した．

4 － 2 実践

本壁画制作は計画では 3 日間であったが，実制作では 4 日間費やした．また，事前に足場と養生は PTA 関係者により設置された．本壁画に使用する絵具は屋外用水性アクリル絵具を選択した．参加者は子ども達と教職員，大学関係者，大学生であり，ボランティアによる制作である．

期日　2015 年 10 月 23 日（金）～ 26 日（月）
参加大学生　1 日目 8 名，2 日目 9 名，3 日目 8 名，
　　4 日目 2 名　計 27 名
日程　10 月 23 日（金）
　　9:00　壁面洗浄，ジェッソ下地材塗り
　　12:00　昼食休憩
　　13:30　小中学生参加
　　（ジェッソ下地材塗り）

チョークによる下描き
17:00 後片付け 終了
10 月 24 日（土）
9:00 上端から彩色．青で空を塗る．
12:00 昼食休憩
13:00 着彩 坂下校長先生参加
17:00 後片付け 終了
10 月 25 日（日）
8:30 着彩 特別支援学校同窓生参加
12:00 昼食休憩
13:00 着彩
17:00 後片付け 終了
10 月 26 日（月）
9:00 細部描写 垂れ修正
12:30 後片付け 終了

4 日間の制作の後，11 月 2 日（月）9:30 ～ 10:00 披露会が行われ，そこで附属特別支援学校高等部生徒が制作参加．生徒会長による象の目の描き入れが行われ完成となった．

5 まとめ

本壁画制作は子どもが達成感を感じる壁画制作の実践研究である．

原画に沿って描く上で，子どもに高度な筆使いや色彩造りなどの技法は使いこなすことは難しい．しかし，高い完成度は誰でも求めるものである．出来ないことで自己肯定感を損なうことと，完成の満足感のないままに放置することも避けたいことである．子ども達に達成感を味あわせる為の取り組みとして考察し取り組んだ 2 つの点については成功を収めたと解する．

原画つくりにおいては児童生徒全員が「夢と希望」の絵を描き，その中から 12 作品を原画に取り入れ，子どもの生き生きとした絵の良さを失わせることなく魅力的に構成し仕立て直した．束縛を離れている子どもの絵は変化に富み驚く．僅かな点，線にも想いが汲み取れる．一見雑であるが投げやりな落書きではない．また，技術に頼る面もなく，内から出た筆跡・痕跡に魅力がある．それはアール･ブリュットの魅力である．その魅力を壊さず壁画として成しうるように修正し対処できたことが今回の核となる部分である．

全員による壁画制作参加では全職員による協力があり実現できたものである．同窓会, PTA の協力もあり，予算面，事前準備，事後処理に至るまでサポートされた．描き手が描くことに集中できたことも良作を生み出す核となる．大学生の参加もあり，1 年生は大学の授業の一環（教職実践基礎演習）として行われた．子どもと関わる機会が設けられたことも本壁画制作の要点である．学生は絵具の垂れや修正等を行い完成に導いた．

おそらく，子どもが原画通りに描くとなるとイメージ通りにいかず自己肯定感を失い，表現に潜む魅力を発揮できないことは想像される．有効な手助けが必要なはずである．

子どもに壁画の自己達成感を満たさせる要因は，上記 2 点の核となる取り組みがなさせたものであろう．難解なことは子どもだけでは難しい．見えない取り組みによる支援があればこそ難解な事を遣り切る達成感を味わわせることが出来る．そのため今回の屋外壁画制作の 2 つの要点は鍵となるものであった．

また，アール・ブリュットの魅力は今後継続研究していく．

6 おわりに

本壁画制作は，プロジェクトを立ち上げてから 6 カ月かけて成功させたものである．

11 月 2 日（月）の「創立 50 周年記念イベント体育館壁壁面への記念壁画制作披露会」をもって完了した．12 月 12 日（土）の創立 50 周年記念セレモニーにおいても紹介され，全員で成し遂げた創立 50 周年記念に相応しい事業となった．

謝辞

坂下玲子校長先生をはじめ，熊本大学附属特別支援学校の教職員・事務職員の皆様方，PTA の方々，協力を頂いた熊本大学の関係の皆様方に心より感謝申し上げます．

注

本稿は 2016 異文化交流国際学術検討会にて講演した内容を基にまとめたものである．

参考文献

・松永拓己（2011）「共同作業による絵画制作の実践 1- 熊本市旧産業文化会館壁画・附属病院壁画」『熊本大学教育学部第 60 号』．

・松永拓己（2014）「屋外壁画制作による地域貢献―阿蘇内牧にて―」『熊本大学教育学部紀要第 63 号』.
・松永拓己（2015）「屋外壁画制作による地域貢献 2―教材化の可能性―」『熊本大学教育学部紀要第 64 号』.
・松永拓己（2016）「屋外壁画制作の研究―台湾での制作―」『熊本大学教育実践研究第 33 号』.
・ミシェル・ラゴン（1977）『美の前衛たち』美術出版社.
・HW ジャンソン・アンソニー F ジャンソン（2001）『西洋美術の歴史』創元社 .

制作写真

（図 14）制作前の体育館

（図 15）足場設置・養生

（図 16）下地塗り

（図 17）下地完成

（図 18）下絵・着彩

（図 19）着彩 1

（図 20）着彩 2

（図 21）着彩 3

（図 22）着彩 4

（図 23）着彩 5

（図 24）学生と特別支援学校の子ども共同制作

（図 25）完成時

（図 26）完成作品

（図 27）附属特別支援学校生徒会長による
象の目入れ式

（図 28）創立 50 周年記念壁画披露会